新宿鮫

SHINJUKUZAME

無間人形

MUGEN NINGYO

大沢在昌

新宿無間人形

SHINJUKU MUGEN NINGYO

大沢在昌

読売新聞社

鮫

新宿鮫　無間人形

著　者――大沢在昌
編集人――岡野敏之
発行人――中保　章
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇―五五
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
名古屋市中区栄一の一七の六　〒四六〇
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――大口製本印刷株式会社
第一刷　一九九三年(平成五年)十月二十九日
第六刷　一九九三年(平成五年)十一月十五日

ISBN4-643-93069-1 C0093

© 1993, Arimasa Ohsawa
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

新宿鮫

無間人形

レリーフ　黒鉄ヒロシ

装　丁　重原　隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

夕暮れの靖国通りに、三人の少年が立っていた。向かって右端がジーンズの上下を素肌に着け、中央が七分袖のTシャツに黒のショートパンツ、左端は裾を落としたトレーナーにコットンパンツをはき、長く束ねた髪をキャップの後ろから垂らしている。

三人とも銀製のネックレスや指輪をたっぷりと身につけていて、通りの向かいから見つめている鮫島の耳にも、ジャラジャラと音が聞こえてきそうだ。

年齢が十八歳より上ということはありえないだろう、と鮫島は思った。

いきがっているようにも、つっぱっているようにも、見えない。退屈しているわけではなく、しかし興奮してもいない。

そこにいることをごくあたり前の、日常の生活の一カットとしてうけいれている。

交差点を渡って自分たちのほうへ押しよせてくる人波にときおり目を向けているが、その視線に緊張はない。

人を待っているようにも見えるし、単に暇つぶしをしているようでもある。

ジーンズがジャケットから煙草の箱をとりだすと、手慣れた仕草で一本ふりだし、くわえた。ラッキィストライクだった。

ジッポのライターのヤスリを太腿でこすって着火し穂先にもっていく。

三人とも、小刻みに体を揺らしている。

踊っているのだった。ヘッドホンステレオをつけているわけではない。ゲームセンターの騒音を除けば、どこからも音楽は流れてこない。しかし、踊っているのだった。

彼らにしか聞こえない、彼らだけの音楽で踊っているのだ。

三人とも、視線をばらばらに飛ばしていた。

三人はチームだった。よくできたチームだ。三六〇度全方位をカバーしあっている。

歩行者用の信号が赤になり、車が流れだした。三人の姿が車の影になる。

鮫島は畳んだ新聞をわきにはさんだ。

薬屋の角を抜けてきた、ミニスカートのワンピースを着たふたり組の少女が信号で立ち止まった。ひとりは漂白した髪をソバージュにしてたらしている。もうひとりは刈りあげに近いくらい、短くカットしていた。ふたりともよく陽に焼け、過ぎたばかりの夏の名残りを素肌にたっぷりととどめていた。白いソックスを足首の位置でたるませ、スポーツシューズをはいている。

歩行者用の信号が青になった。ふたりは歩きだした。まっすぐに横断歩道を渡っていく。十六歳、と鮫島は見当をつけた。

煙草をとりだし、火をつけた。

ふたりの少女は、三人組に近づいていった。歩道にあがる。刈りあげの娘が右の拳をさっとつきだした。長髪の少年が左の掌でぱっとうけとめた。向かい合ったふたりは、無言のまま、残るほうの掌を上下から打ち合わせた。

そこで再び車の流れが動きだした。

ひとかたまりになった五人は、近くのゲームセンターに向かって歩き始める。

鮫島は、地下道の入口の階段をゆっくりと降りた。三人組の全方位カバーから逃れられるまで、急ぐことはしなかった。

階段の壁が視線をさえぎるまで下に降りると、猛然と走りだした。地下道をまっすぐつっきり、二段おきに階段を駆けあがる。

ゲームセンターの前で地上に出た。入口のクレーンゲームにソバージュの娘とショートパンツ、長髪の三人がとりついていた。ショートパンツと長髪はあいかわらず全方位カバーをつづけている。

駆けあがった鮫島の顔をショートパンツが見つめた。赤茶色をしたさらさらの髪を額の中央で分けている。頬にニキビの跡が残っていた。

無表情にその視線がそらされた。ゆっくりと体の向きをかえ、鮫島には見えない顔の位置で何かをいった。

長髪の背がこわばる。

まただ、と鮫島は思った。自分の写真が流れているのか、それともこいつら十代の連中には、お巡りを一瞬で見抜く超能力が備わっているのか。

やくざたち、大人の犯罪者が絶対に見抜けない、鮫島の正体を、この連中は一発で見破る。

通りの向かいにいたのはだからだった。十メートル以内に近づくと、この連中は、さも悪臭を放つ汚物がそこに現れたかのように、ばらばらになって歩き去るのだ。

鮫島に横顔を向けていたショートパンツがくるりと向き直った。長髪は、ゲームセンターの奥の暗い一角に入りこもうとしていた。

鮫島はまっすぐにそちらへ向かった。

「まあまあまあ」

ショートパンツが立ち塞がるように踏みだしてきた。唇に、にやけたような薄い笑いをはりつけている。

「どけ」

「まあ、そういわないで」
鮫島はショートパンツの肩に手をかけた。
「おっと」
その手を見つめ、わざとらしく鮫島を見あげる。鮫島はいった。
「いくつだ、お前」
「十七ざんす」
ショートパンツはおどけたようにいった。ソバージュの娘はいちはやく姿を消していた。
「成人式、ム所で迎えたいか」
「冗談きついざんす」
「だったらどけ」
唇をすぼめ、肩をすくめた。鮫島はその体を押しのけ、ゲームセンターの内部に入った。まっすぐ奥に向かう。
ゲームセンターの中は、時間帯もあって十代の若者がいっぱいだった。週に二度以上、同じ防犯課の少年係が狩りこみをかましている。が、この時間帯だと、喫煙以外では何の点もあがらない。
三分の一は、学校の制服を着ていた。
長髪と刈りあげが、もっとも奥の、コイン販売機の前にいた。長髪が壁についた手に、よりかかるようにして、刈りあげが体をくねらせている。
ジーンズの姿がない。
このゲームセンターの造りはよく知っている。右奥の競馬マシンのわきに、細いドアがあり、ビルの裏口へと通じているのだ。
鮫島はすっとそちらに向かった。長髪が壁から手を離し、同じ方向をめざした。

ドアにたどりついたのは、長髪のほうが一歩早かった。鮫島と向き合うようにしてもたれかかり、ショートパンツとまったく同じような薄笑いを浮かべた。左手をコットンパンツのポケットにさしこんでいる。

「やっほう」

今度は鮫島は容赦しなかった。右手で襟首を引き、左手で相手の右肩を押しながら、足払いをかけた。

長髪の体が半回転して床に叩きつけられた。相手の反応を待たず、またぎこえ、ドアを押し開けた。

右手に狭い非常階段がある、細長い廊下だった。正面のガラス扉に、ジーンジャケットの背中がとりついていた。

鮫島は走りだそうとした。瞬間、左の足首をつかまれ、よろけて框(かまち)をつかんだ。

「おっじさーん、痛えよう」

ふりほどいて向きをかえると、長髪が立ちあがったところだった。

ジーンズはそのすきにガラス扉をくぐりぬけた。

長髪がコットンパンツから左手を抜きだした。その手もとで金属製の羽がくるくると回転し、カシャッという音をたてて、ナイフになった。

「刺しちゃうよ」

低い位置から、鮫島の太腿あたりをめがけて、無雑作につきだした。ファッションでなく、刃物を扱い慣れた手並みだった。

鮫島は素早くとびのいた。

長髪の目の底に光が宿っていた。

「あんた、どこの誰だか知らないからさ。いきなり押し倒されたからさ。かっときて刺しちゃうわけ」
鮫島はじりじりと後退した。一刻も早く、ジーンズを追いかけたかった。
長髪は右手を高くさしあげ、掌を鮫島に向けていた。爪先に力をため、ふっと前にでる真似をする。
そのフェイントに、鮫島は背を向けることができずにいた。
「ほっ」
長髪が息を吐き、またもフェイントをかけた。高い位置の右手に気をとられると、低い場所からナイフが襲ってくる。
狭い廊下では、前後にしか動けない。
鮫島は決心して、右手を腰の後ろに回した。皮ケースに入れて吊った特殊警棒の握りをつかんだ。
それを待ちかまえていたかのように、長髪が襲いかかってきた。
鮫島の目は長髪の左手の動きに釘づけになっていた。
が、長髪の右手がキャップを鮫島の顔に叩きつけたとき、思わず離れた。体をひねろうとしてひねりきれず、左の臀部をチクッとした痛みが駆けぬけた。
鮫島は歯をくいしばりながら、ひきぬいた特殊警棒を握りなおし、長髪の左手にふりおろした。
ガツッという鈍い音がして、長髪が呻いた。ナイフが廊下に落ちる。
「馬鹿野郎がっ」
鮫島はどなって、長髪の額に肘打ちを浴びせた。長髪は壁に体をあて、半回転してすわりこんだ。
「痛ってえ！」
叫んで右手で左手をかかえこんだ。頬をふくらませ、それきり言葉を失って、目を丸くみひらいて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いる。
鮫島はそのまま走りだした。左足を踏みだすたびに、疼痛が臀部を駆けぬける。
ガラス扉を押し開け、裏通りにとびだした。追われる者は習性として、歌舞伎町の奥へ奥へと向かう。人通りの密な場所に逃れこもうとするのだ。
わずかに足をひきずりながら鮫島は走った。自分の傷がどれほどかはわからなかったが、ジーンズをはいているせいで、出血はあるていどおさえこまれる筈だ。場所からいっても、さほど心配する必要はない。
職安通りの手前までに追いつけなければ、鮫島の負けだった。もちろんそれ以前に、ジーンズの少年が品物を処分する可能性もある。
が、それほどの余裕はまだないはずだ。今は必死に、歌舞伎町を逃げのびることしか考えていないだろう。処分するゆとりが生まれるのは、とりあえず追っ手の目が届かない位置を確保してからだ。
同じ理由で、どこかの店に入ることも、少年は避けるにちがいなかった。追われる者の本能は、一カ所にとどまることを嫌う。
よほど親しい人間のいる店でもあって、その厨房などに逃げこもうと考えないかぎり、まだ路上にいるはずだ。
東急文化会館の前で、その姿を見つけた。ハンバーガーショップの店先の人ごみの中に立っている。
ジーンズは、逃亡の第二段階に入ったところだった。店頭に並べられた、金属製のダストボックスのひとつから、離れようとしていた。
鮫島との距離は、三十メートルほどあった。ジーンズは鮫島に気づいていない。別のものに気をとられているのだった。

コマ劇場の前を二名の制服巡査が徒歩で巡回していた。
鮫島はヒップポケットから呼び笛をとりだし、思いきり吹いた。
ピリリリという鋭い音が響き渡った。歩行者の目がいっせいに自分に注がれる。即座に反応したのは、制服の巡査たちだった。
ダストボックスの前で凍りついているジーンズの目が、鮫島を認め、まん丸くなった。
巡査たちは、鮫島に向かって走りだした。鮫島は首をふり、右手をのばした。
「そのジーンズの上下だ！」
弾かれたように、ジーンズが駆けだした。二人の巡査がぱっと分かれ、前と後ろからはさみ撃ちにかかった。
三塁ランナーの突入を阻止するキャッチャーのように、巡査のひとりが立ち塞がる。くるっと回れ右したところを、もうひとりの、後ろからきた巡査が組みついた。
「離せよ！　何だよっ」
ひとかたまりになって地面をころげ回りながら、ジーンズはわめき声をあげた。
「立てっ」
巡査に引きずり起こされ、ジーンズは手をふりほどいた。
「離せよ、何したってんだよ」
鮫島は左足を引きずりながら近づいていった。二人は警ら課に属する若い巡査だった。どちらも、二十代の半ばだ。
ひとりが鮫島の怪我に気づいた。
「警部、血が――」
「大丈夫だ」

「刺したのはこの男ですか」
「冗談じゃねえよ！」
ジーンズはわめいた。人だかりができつつあった。
「身体検査」
鮫島はいった。
「ここでですか!?」
驚いたように、鮫島の怪我に気づいた巡査がいった。ふつうは、最寄りの派出所でおこなう。
「そうだ」
鮫島は頷いた。二人はけげんな表情をしながらも、従った。
「まっすぐ立て。両足を開いて、手を高く上げろ」
「おい、人権じゅうりんじゃねえかよ。やめろよ」
少年は叫んだ。
「いいから、いうとおりにしなさい」
公衆の面前でおこなう身体検査を意識してか、巡査の言葉がやわらかくなった。
「いい言葉知ってるな」
鮫島は少年に詰めよった。少年は鼻孔をふくらませ、鮫島をにらみつけた。
「何したっつうんだよ。え？　おじさんよ」
鮫島は無言で巡査たちの検査を見守った。手袋をはめた巡査の手が、ジャケットのポケットから、財布、ライター、煙草、キィホルダー、ポケットベルをとりだした。
「以上です」
巡査がいった。表情は冷静を装おうとしていたが、かすかな当惑の色がその目にはあった。

「煙草ですか、お巡りさん」
皮肉たっぷりに少年は、口を歪めた。
「黙ってろ」
もうひとりの巡査がいった。
「煙草もってただけで、こうなわけ？　お巡りさんだったら、そういうことしたっていいわけ？」
少年はひるまなかった。ゆらゆらと顔を動かしながら、歩みよってきた鮫島の顔をにらみつけた。目もとが赤くなった。いきなり大声を出した。
「ふざけんじゃねえよ！　俺が何したってんだよ！」
「静かにしろ」
両側から腕をつかみながら、ふたりの巡査は鮫島を見あげた。
「何やったっうんだ、いってみろ！　ほら！」
「手袋貸してくれ」
鮫島は巡査のひとりにいった。
「はっ」
巡査は制服から白手袋をとりだした。四人の周囲には、数十名の人だかりがすでにできている。
「こっちへ」
鮫島はいって歩きだした。白手袋をはめる。少年が口をつぐんだ。
「はい、いって。いきなさい」
四人の移動とともにくずれ、再構成されようとしている人垣に、巡査が散らそうと声をあげた。が、いっこうに野次馬の数は減らず、増える一方だった。あきらめた巡査は、肩につけている携帯受令器で応援を要請した。

鮫島がハンバーガースタンドの前に並んだダストボックスのかたわらに立ったとき、新たに四人の巡査が駆け足でやってきた。
四名はただちに散開し、半径五メートル以内に野次馬を立ち入らせない輪をこしらえた。
「すいません、ちょっとよろしいですか」
中央のダストボックスの上に紙コップをおき、ハンバーガーを頬ばっていたカップルに、鮫島は近づいた。
ふたりはあわててあとじさった。
ダストボックスは、ステンレス製の、高さ一メートルほどの箱だった。スイング式の投入口が前と後ろの二カ所にある。
鮫島は手袋をした手でダストボックスの蓋をもちあげた。
中には水色をした、大判のビニール袋が固定されていた。投入されたゴミはその中に落ちる仕組になっている。
コーラやシェイクの紙コップ、発泡スチロールのハンバーガーケース、包み紙が三分の一ほど詰まっていた。飲みかけや、角氷を残したままのコップを投入するので、中味は湿っている。
外したダストボックスの蓋を地面におき、鮫島は少年の顔を見やった。
「何だよ」
口をとがらせていったものの、汗をかき、顔色が青ざめている。
鮫島はビニール袋の中に手をさしこんだ。ペーパーナプキンや、散らばったポテトフライ、紙コップなどをかきわけた。
折りたたんだグレイのビニール袋をやがて見つけた。大きさは、煙草の箱ふたつぶんくらいで、厚みはひとつぶんくらいだ。

袋の上から、指先の濡れた手袋ごしに中味を確認した。親指の腹にすっぽりとおさまる大きさの円型が押しかえしてくる。

袋を開き、中をのぞいた。裏がアルミ箔で表が透明なシートに包まれた錠剤のシートが五段になって入っていた。

「これは何だ?」

「知らねえよ。俺んじゃねえもんよ」

「お前の指紋がでたらどうする?」

鮫島はいって、袋をたたみ、巡査に渡した。一拍、間をおいて、少年がどなった。

「知らねえっていってんだろうが!」

「そうか」

鮫島はいって、静かに少年の目を見つめた。少年は荒々しく息を吐き、鮫島を見上げた。ふたりはつかのま、見あった。やがて少年が目を落とした。

「署にいこう」

鮫島は告げた。

取り調べには、鮫島と新宿署防犯課長の桃井があたった。鮫島が拾いあげたビニール袋と、ダストボックスの中味は鑑識係に回された。少年は新宿署に到着してからは、ひと言も口をきかなくなった。

黙秘状態のまま、指紋を採取され、その指紋は、ビニール袋と中味の錠剤シートから採取されたものと一致した。

報告は、医務室で臀部の治療を受けていた鮫島のもとにもたらされた。傷は深さ三センチ、長さ八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com